

財団法人八尾市文化財調査研究会報告85

- I 楽音寺遺跡（第3次調査）
- II 木の本遺跡（第13次調査）
- III 太子堂遺跡（第11次調査）
- IV 竹渕遺跡（第10次調査）

2005年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



財団法人八尾市文化財調査研究会報告85 正誤表

頁・行	誤	正
6頁第1表⑩	20040525～2004528	20040525～20040528
6頁第1表⑪	『(財)八尾市文化財調査研究会報告』	『(財)八尾市文化財調査研究会報告82』
6頁行	⑤(⑪)	⑤⑪
10頁第4図	出土遺物実測図	S E -101遺物実測図
13頁11行	(2000西村)	(西村2000)
13頁11行	(2000高萩)	(高萩2000)
13頁12行	(2001森本)	(森本2001)
報告書抄録	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょううきょん きゅうかいほうこく	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょううきょん きゅうかいほうこく

八尾市文化財調査研究会報告85

- I 楽音寺遺跡（第3次調査）
- II 木の本遺跡（第13次調査）
- III 太子堂遺跡（第11次調査）
- IV 竹渕遺跡（第10次調査）

2005年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

大阪府の東部にある八尾市は、東に生駒山地を望み、河内平野のほぼ中央に位置しています。現在、八尾市の南方を東から西に流れる大和川は、今から約300年前の江戸時代の宝永元年(1704年)に、付け替えられたものです。付け替え以前の大和川は、奈良盆地から西へと向い、大阪府柏原市付近で、まず、石川と合流して河内平野を北へ流れ、さらに、淀川に合流し、大阪湾へと注いでいました。この川は、度重なる洪水や氾濫を起こし、先住民を脅かしますが、先入たちは、厳しい自然環境と戦いながら、河内平野にある肥沃な土壤を耕し、生活基盤としてきました。こうしたことから、この平野の中には、先人たちが築いてきた文化遺産が、数多く眠っています。

八尾市は、人口27万人余りを有し、大都市郊外の近代都市として、発展してきており、公共や民間の開発が数多くあります。これら、都市化の進展によって、地中に眠る文化遺産が壊され、日々どこかで消滅しているのも、周知の事実です。そうした状況のなか、調査・研究を通じて明らかとなった文化遺産を、後世に伝えていくことが、私共に課せられた大きな責務と考えています。

この度、平成14~16年度に発掘調査を行ったもの内、公共事業に伴う4件の調査の整理が完了しましたので、これらをまとめ、報告書として刊行する運びとなりました。

本書が、地域の歴史を解明していく資料として、また、埋蔵文化財の保護・普及のための資料として、広く活用されることを願って止みません。

最後に、今回の調査に関し、ご協力頂いた関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げますと共に、今後とも、一層のご協力とご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成17年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会
理事長 岩崎 健二

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成14～16年度に実施した発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成17年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I 西村公助・樋口 薫、II 原田昌則、III 西村、IV 関田 清一で、全体の構成・編集は西村が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1（平成8年7月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』（平成13年度版）をもとに作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位（T. P.）である。
1. 本書で用いた方位は磁北及び座標北（国土座標第VI系）を示している。
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
弥生土器・土師器・瓦器・埴輪・石器一白、須恵器・陶磁器一黒 屋瓦一斜線
1. 土色については『新版 標準土色帖』1996 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目 次

はしがき

序

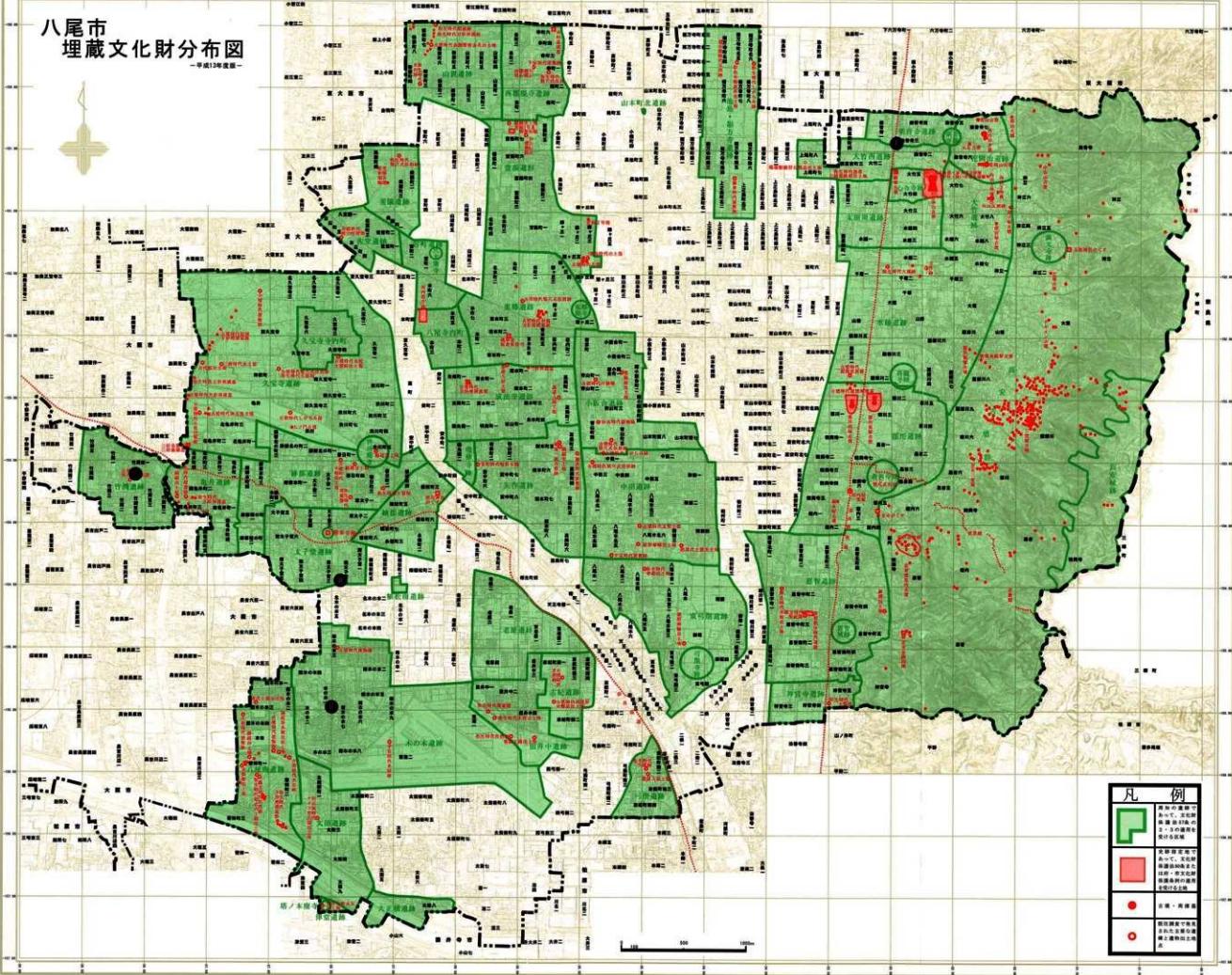
八尾市埋蔵文化財分布図

I 楽音寺遺跡第3次調査 (G O2003-3)	1
II 木の本遺跡第13次調査 (S K2004-13)	5
III 太子堂遺跡第11次調査 (T S 2002-11)	13
IV 竹 渕遺跡第10次調査 (T K2003-10)	19

報告書抄録

八尾市
埋蔵文化財分布図

-平成13年度版-



I 楽音寺遺跡第3次調査(GO2003-3)

例 言

1. 本書は大阪府八尾市楽音寺1丁目地内で実施した上水道布設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する楽音寺遺跡第3次調査(GO2003-3)の発掘調査業務は八尾市教育委員会の指示書(八教生文第336号 平成14年12月25日)に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成15年4月10日～6月11日(実働3日)にかけて、西村公助・樋口 薫を担当者として実施した。調査面積は約30m²を測る。
1. 本書作成に関わる業務および執筆・編集は西村・樋口が行った。

本 文 目 次

1.はじめに	1
2.調査概要	1
1) 調査の方法と経過	1
2) 検出遺構と出土遺物	2
3.まとめ	3

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図	1
第2図 第1・3区地層図	2

図 版 目 次

図版一 調査地周辺 第3区北壁

I 楽音寺遺跡第3次調査(GO2003-3)

1.はじめに

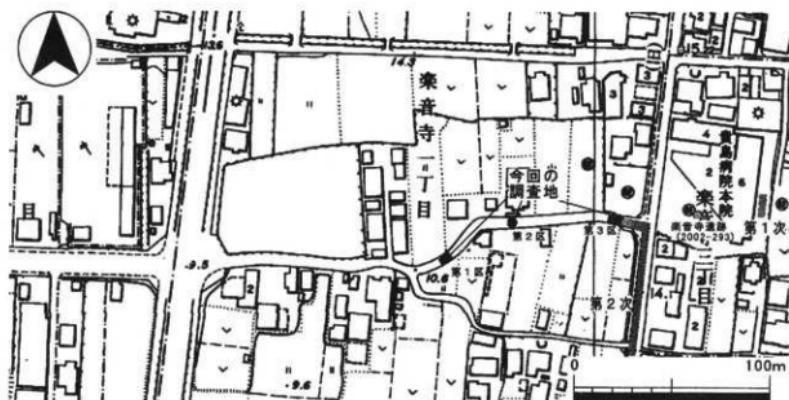
楽音寺遺跡は八尾市北東部、東大阪市との市境に位置する。現在の行政区画では、楽音寺1・3～5丁目がその範囲と推定される。地形的には生駒山地西麓の扇状地上に立地する。同一地形上には、南に大竹西遺跡、鏡塚古墳、心合寺跡、心合寺山古墳、太田川遺跡、水越遺跡などがあり、東には楽音寺跡、花岡山遺跡、南東には大竹遺跡が存在する。また、東～南東側の生駒山地西麓部には、高安古墳群が展開している。

今回の調査地が存在する楽音寺1丁目付近では、過去に数回の調査を行っている。特に近隣での調査成果をあげると、東側に接する当研究会第1次調査地では、縄文時代後期の落ち込み状遺構や平安時代の井戸と柱穴を検出している(高萩1984)。さらに、南東に接する当研究会第2次調査地では、弥生時代と中世に相当する地層を確認した(高萩2003)。また、東側に隣接する遺構確認調査地でも、縄文時代と平安時代に相当する可能性がある地層を確認している(成海2003)。以上のことから、本調査地付近にも縄文時代以降の遺構が存在している可能性が高いと予想され、今回調査するに至った。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、当研究会が楽音寺遺跡内で行った第3次調査にあたる。上水道布設工事の開削部分(2箇所)と立坑部分(1箇所)の合計3箇所について調査を行った。なお、今回の工事は、道路に水道管を埋設するため、昼間の掘削は不可能であった。したがって、3箇所とも夜間の調査になった。調査では、西側の開削部分(幅約1.5m・長さ約13m)を第1区、立坑部分(直径2.0m)を



第1回 調査地周辺図 (S=1/2500)

第2区、東側の開削部分(東西約幅約1.5m、長さ約5m)を第3区と呼称した。総面積は約30m²を測る。調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載されている標高値(調査地の南東側道路上T.P.+14.1m)を使用した。

調査は、現地表下約2.0m前後まで機械による掘削を実施し、遺構・遺物の有無の確認および記録保存の作成に努めた。

2) 検出遺構と出土遺物

基本層序

第1区 現地表面はT.P.+10.8m前後である。G.L.-1.7m付近までの地層を観察した結果、3層(100~102層)の地層を確認することができた。

100層 客土・盛土である。既設のガス埋設管に伴う擾乱層である。

101層 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト。非常に汚れた地層である。雲状の酸化マンガンを極めて多く含み、植物の根の痕跡と思われる縦方向の灰色シルトが混在する。

102層 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂混シルト質粘土。雲状の酸化マンガンを含む。101層同様、植物の根の痕跡と思われる縦方向の灰色シルトが混在する。

第2区 本工区については、ケコム工法を用いた掘削が実施されたため、遺構の有無の確認はもとより、地層の堆積状況の確認さえもできなかった。したがって、基本層序は不明である。

第3区 現地表面はT.P.+13.956mである。G.L.-1.7m付近までの地層を観察した結果、6層(300~305層)の地層を確認することができた。

300層 客土・盛土。

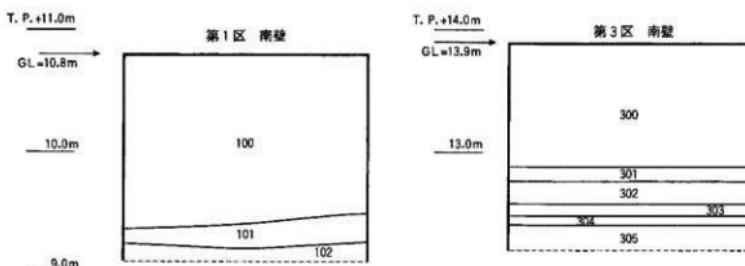
301層 5G5/1緑灰色細礫混細粒砂～粗粒砂。上方は土壤化の影響で汚れている。

302層 10YR5/3にぶい黄褐色～5YR5/6明赤褐色細粒砂～粗粒砂。上面には、酸化鉄分の沈着が認められ、そのために、その部分のみ固く締まっているのが特徴的である。

303層 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混粘土質シルト。若干粘性に富む地層である。自然堆積層。

304層 10YR6/1褐灰色粘土質シルト～板細粒砂。粘性に富んだ地層である。自然堆積層。

305層 10YR5/3にぶい黄褐色 極粗粒砂～細礫。ラミナ構造などは確認できないが、水成層の可能性が高い地層である。扇状地性の堆積物と推測される。



第2図 第1・3区地層図 (S=1/40)

3. まとめ

第1区のT.P. +9.4m前後で確認した101層は土壤化している可能性が高い。遺物の出土がないため、時期の限定はできないが、近世以前の地層であることは確実である。

また、第3区のT.P. +12.9m前後で確認した301層の上方は、土壤化のためか汚れている地層であった。この層の時期も不明であるが、遺構確認調査で確認しているT.P. +14.0m付近の地層が平安時代に相当すること(成海2002)や、当研究会第2次調査の第1区で確認したT.P. +13.5m付近の地層が、弥生時代に相当すること(高萩2003)から、301層は弥生時代より古い地層である可能性が高い。

参考文献

- ・高萩千秋 1984 「7. 楽音寺遺跡」『昭和58年度事業概要報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告5 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 2003 「10. 楽音寺遺跡(2002-293)の調査」『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告48 平成14年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・高萩千秋 2003 「8. 楽音寺・大竹西遺跡第2次調査(GO2001-2)」『平成14年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

図版



調査地周辺(南西から)



第3区北壁(南から)

II 木の本遺跡第13次調査（SK2004-13）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市木の本1丁目64で実施した防火水槽築造工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する木の本遺跡第13次調査(S K2004-13)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第202号 平成16年10月22日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成16年12月20日～12月22日(実働3日間)にかけて原田昌則を担当者として実施した。面積約29m²を測る。現地調査においては、田島宣子、永井律子、村田知子が参加した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測は北原清子・中村百合・村井俊子、図面トレースは北原、遺物写真撮影は垣内洋平が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

1.はじめに.....	5
2.調査概要.....	7
1) 調査方法と経過.....	7
2) 基本層序.....	7
3) 検出遺構と出土遺物.....	9
3.まとめ.....	11

挿　図　目　次

第1図 調査地周辺図.....	5
第2図 調査位置図.....	7
第3図 調査区平面図.....	8
第4図 S E-101出土遺物実測図.....	10

表 目 次

第1表 周辺の調査地一覧表 6

図 版 目 次

図版一 調査区全景、西壁、北壁

図版二 S E - 101出土遺物

II 木の本遺跡第13次調査 (S K2004-13)

1. はじめに

木の本遺跡は八尾市南部に位置する遺跡で、現在の行政区画では木の本1～3丁目、南木の本2～9丁目、空港1・2丁目一帯の東西1.8km、南北1.2kmがその範囲とされている。地理的には、旧大和川の主流であった長瀬川左岸一帯に広がる低位冲積地上に展開しており、東部では同条件下で田井中遺跡・志紀遺跡・老原遺跡が隣接する他、西・南部では羽曳野丘陵の北方に連なる河内台地先端部を占地する八尾南遺跡・太田遺跡に隣接している。

当遺跡発見の機会は、昭和56年(1981)年3月に南木の本4丁目で八尾市教育委員会が実施した店舗建設に伴う試掘調査による。統いて行われた発掘調査では、現地表下約3.0m(T.P. +6.9m前後)で弥生時代中期前半(畿内第Ⅱ様式)・古墳時代前期前半(布留式古相)・古墳時代中期の遺構・遺物が検出され、複合遺跡として認識されるに至っている。昭和57・58年には、遺跡範囲の中央部から東部を占地する八尾空港の整備事業に伴う発掘調査が実施され、平安時代後期の居住域・生産域や志紀郡北部における古代・近世の条里遺制に関する区画溝の存在が確認されている。



第1図 調査地周辺図(S=1/5000)

第1表 周辺の調査地一覧表

番号	略号	調査原因	調査主体	調査期間	文 献
①	S K82-1	店舗建設	八尾市教育委員会	19810326～ 19810411	原田昌則 1983「第3章 木の本遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 1980・1981年度』八尾市教育委員会
②	90-176	河川改修	〃	19910221 1991033	酒 斎 1992「2. 木の本遺跡(90-176)の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書II』八尾市教育委員会
③	S K82-2	住居建設	(財)八尾市文化財調査研究会	19830221～ 19830303	米田敏幸 1983「I. 木の本遺跡」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査—その成果と概要』(財)八尾市文化財調査研究会
④	S K83-3	〃	〃	198306～ 19830618	高枝千秋 1984「木の本遺跡第3次調査」『昭和58年度事業概要報告』(財)八尾市文化財調査研究会
⑤	S K90-4	公共下水	〃	19901110～ 19910311	西村公助 1991「VI 木の本遺跡(第4次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会
⑥	S K91-5	放水路改修	〃	19911202～ 19911219	岡田清一 1992「XIV 木の本遺跡第5次調査(S K91-05)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会
⑦	S K96-7	公共下水	〃	19961001～ 19961016	岡田清一 1998「VII 木の本遺跡(第7次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告60』(財)八尾市文化財調査研究会
⑧	S K2002-9	〃	〃	20020708～ 20020802	成海作子 2004「III木の本遺跡第9次調査(S K2002-9)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告78』(財)八尾市文化財調査研究会
⑨	S K2002-10	区画整理	〃	20030128～ 20030314	西村公助 2003「III木の本遺跡第10次調査(S K2002-10)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告76』(財)八尾市文化財調査研究会
⑩	S K2003-11	公共下水	〃	20030227～ 20030373	西村公助・岡田清一 2004「IV木の本遺跡第11次調査(S K2002-11)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告78』(財)八尾市文化財調査研究会
⑪	第1区	平野川改修	大阪府教育委員会	19960210～ 19960307	藤沢宣吉・横田明・地村邦大・井西賀子 1999「木の本遺跡発掘調査・III」大阪府教育委員会
⑫	第2～5区	〃	〃	199704～ 199903	岩瀬透・横田明 1999「木の本遺跡発掘調査・IV」大阪府教育委員会
⑬	第6区	〃	〃	200003～ 200005	難田道子 2001「木の本遺跡発掘調査・V」大阪府教育委員会
⑭	S K2004-12	公共下水	(財)八尾市文化財調査研究会	20040525～ 20040528	原田昌則 2004「木の本遺跡第12次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告』(財)八尾市文化財調査研究会
⑮	S K2004-13	防火水槽	〃	20041220～ 20041222	本著

今回、第13次調査を実施した八尾市木の本1丁目64付近は、遺跡推定範囲の北西部にあたる。遺跡範囲の北西部では、遺跡の契機となった昭和56年の調査以降、現在に至るまで大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により10数次に亘る発掘調査が実施されている。それらの成果を時代別に調査地点で示せば、弥生時代中期前半(畿内第Ⅱ様式)の遺構は①地点のみで検出されている。古墳時代初頭前半～後半(庄内式古柏～新柏)の遺構は、大阪府教育委員会が南木の本1～3丁目で実施した平野川改修工事に伴う⑪～⑯で検出されている。続く、古墳時代前期前半(布留式古柏)の遺構は、前代の居住域と重複し、さらに南西部へ拡大しており⑪～⑯に加えて①②で検出されている。古墳時代中期の遺構は①②④⑤(⑪～⑯)の各調査で検出されており、土師器・初期須恵器・韓式系土器・製塙土器等の土器類が大量に出土している。平安時代中期の遺構は③⑯で検出されている。中でも、③の調査においては大量の土師器、黒色土器のほか近江系縄釉陶器、⑨では掘立柱建物が検出されており、延喜式による楠本神社3座のうちの楠本神社(南木の本7丁目)、楠本神社(木の本1丁目)との有機的な関係が示唆される。今回の調査地点は第7次調査(⑦)から南東60m地点にあたる他、楠本神社(木の本1丁目)が東に隣接している。その他、調査南東約120m地点には文明九年(1477)に河内若江から当地に遷された光蓮寺(浄土宗本願寺派)があり、河内門徒衆の有力寺院の一つに挙げられている。

2. 調査概要

1) 調査方法と経過

今回の調査は防火水槽築造工事に伴うもので、当調査研究会が本遺跡内で実施した第13次調査にあたる。調査対象地の防火水槽は径6.61mの円形が想定されていたが、調査では壁面調査が困難である等の理由により、対象面積に相当する東西幅5.0m、南北幅5.8m規模の方形の調査区を設定した。調査面積は約29m²を測る。

調査に際しては、現地表下2.0m前後までを機械掘削した後、以下0.4mについては人力掘削と機械掘削を併用し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、現地表下0.7~0.8m(T.P. +10.3~10.2m)に存在する第3層上面で近世後半の井戸1基(S E-101)を検出した。出土遺物はS E-101から出土した室町時代後期の屋瓦類、江戸時代後半の国産陶磁器類以外では、第12層から江戸時代前半の国産陶磁器類が出土しているが量的には僅少である。



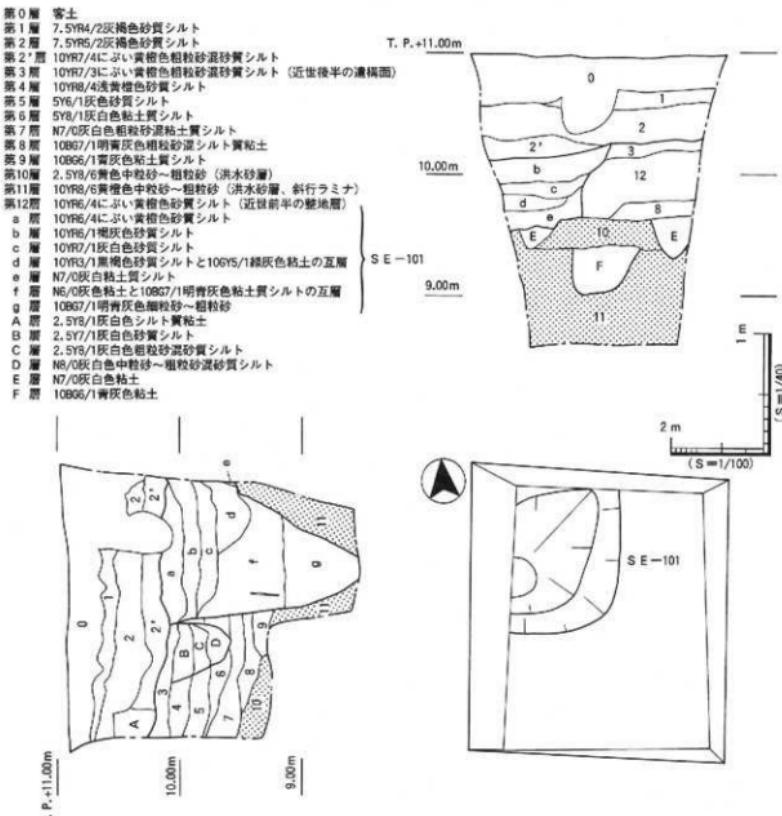
第2図 調査位置図 (S=1/500)

2) 基本層序

第0層が現木の本公園造成時の客土である。第1・2層は灰褐色系の砂質シルトで硬くしまっている。第3層は不均質な粗粒砂混砂質シルトの層相で整地層の可能性がある。上面が近世後半の遺構構築面である。第4~6層は粘土質シルト~砂質シルトの層相で、酸化鉄分・マンガン斑が顕著で土壤化している。第7・8層は粗粒砂が混じるシルト質粘土~粘土質シルトの層相で、無遺物層である。第9層は粘土質シルト。第10・11層は中粒砂~粗粒砂が優勢な河川堆積である。

なお、北壁のみで確認した第12層は整地層と推定され、層中から江戸時代前期に比定される唐津焼碗等が出土している。それ以外の地層において遺物が出土し、時期が特定できたものは無い。ここでは、13層(第0層～第12層)を抽出して基本層序とした。

- 第0層 客土。層厚0.18～0.5m。現地面の標高はT.P.+10.9～11.0mを測る。
- 第1層 7.5YR4/2灰褐色砂質シルト。層厚0.1～0.15m。
- 第2層 7.5YR5/2灰褐色砂質シルト。層厚0.15～0.3m。
- 第2'層 10YR7/4にぶい黄橙色粗粒砂混砂質シルト。0.1～0.2m。マンガン斑を認める。
- 第3層 10YR7/3にぶい黄橙色粗粒砂混砂質シルト。層厚0.08～0.12m。不均質な層相でマンガニ斑を認める。上面が近世後半の遺構築面。



第3図 調査区平面図

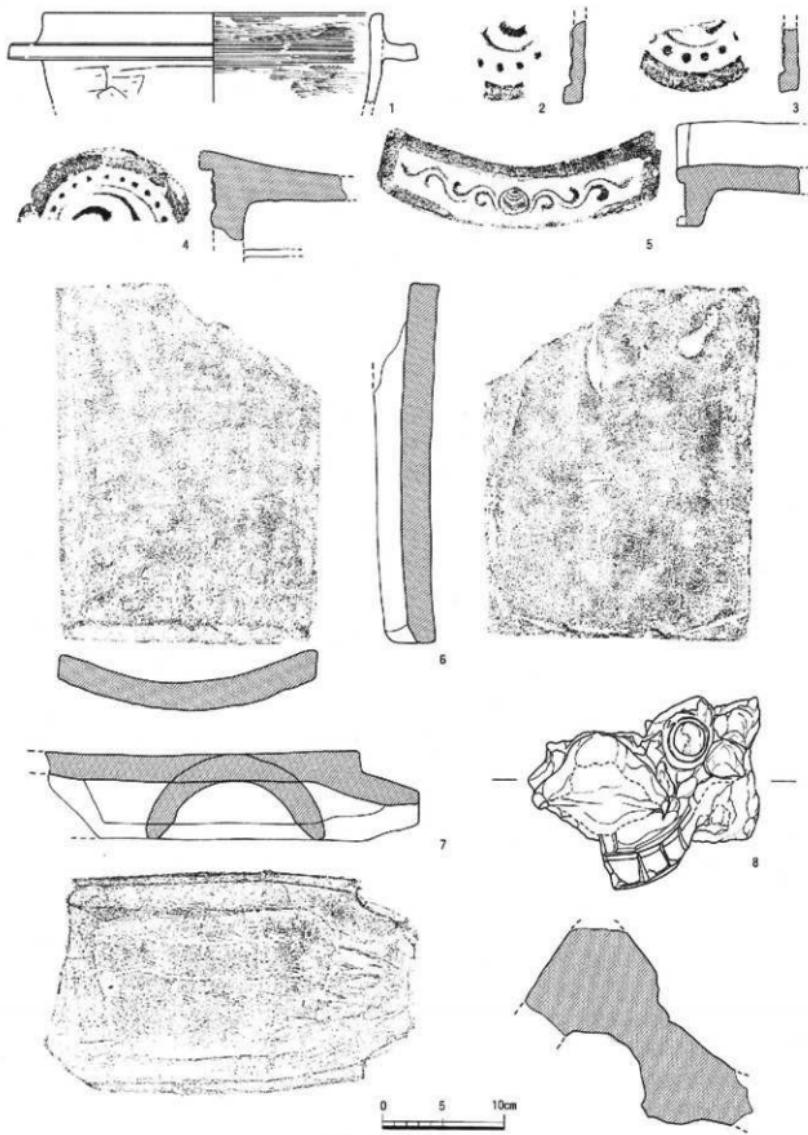
- 第4層 10YR8/4浅黄橙色砂質シルト。層厚0.1~0.15m。酸化鉄・マンガン斑が顯著。
- 第5層 5Y6/1灰色砂質シルト。層厚0.15m。酸化鉄・マンガン斑が顯著。
- 第6層 5Y8/1灰白色粘土質シルト。層厚0.04~0.2m。酸化鉄斑が顯著。
- 第7層 N7/0灰白色粗粒砂混粘土質シルト。層厚0.1~0.25m。
- 第8層 10BG7/1明青灰色粗粒砂混シルト質粘土。0.08~0.15m。
- 第9層 10BG6/1青灰色粘土質シルト。層厚0.15m。
- 第10層 2.5Y8/6黄色中粒砂~粗粒砂。層厚0.1~0.2m。洪水砂層。
- 第11層 10YR8/6黄橙色中粒砂~粗粒砂。層厚0.9m以上。洪水砂層。斜行ラミナが認められる。
- 第12層 10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルト。層厚0.4m。北壁のみで検出。近世前半の整地層。

3) 検出遺構と出土遺物

井戸 (S E)

S E-101

調査区の北西部で検出した。北壁ならびに西壁で一部を確認したもので、北部および西部は調査区外に至る。構築面からの検出でないため、平面形状や数値は不明であるが、検出部分で東西幅2.9m、南北幅3.4m、深さ1.65mを測る。井戸側については大半が抜かれていたが、f層中に板材を横位に使用した井戸側の一部が残存していたため、横板組の井戸側であったと推定される。埋土は7層から成る。そのうち、埋土上層を占めるa層~d層については、炭・灰と共に江戸時代後期の日常雑器類、室町時代後期の屋瓦類等が出土していることから、井戸跡の上部については、廃絶後にゴミの廃棄場として利用されていたことが推定される。遺物はb層から江戸時代後期の屋瓦、c層から江戸時代後期の国産磁器(肥前焼系)、d層から室町時代後期の屋瓦、江戸時代後期の国産陶磁器、f層から江戸時代後期の屋瓦出土している。量的にはd層から出土したものが多。d層からは、江戸時代後期(18c代)の国産陶磁器と共に室町時代後期の屋瓦が出土しており、室町時代後期の屋瓦類については、この段階に廃棄されたものと推定される。8点(1~8)を図化した。1は土師器羽釜の小片である。復元口径27.8cm、復元器径33.6cmを測る。頸部はほぼ垂直方向に伸びるもので、口縁端部は丸味を持って終わる。鍔は厚みがあり、水平方向に伸びるもので、端部は平坦で外傾している。器面調整は体部内面が横位のハケ、外面は口縁部および鍔部がヨコナデ、鍔部以下にはヘラケズリが行われている。色調は外面が淡橙色、内面が黒灰色である。胎土には2mm以下の長石が散見される。16世紀代のものか。2・3は三巴文軒丸瓦の小片である。共に左巻きの三巴文であるが、中央部分を欠くため意匠は明確でない。外区の珠文は大粒で、隆起は低く密に配されている。外縁は幅が狭く低い。焼成は2がやや不良、3は良好である。色調は2が灰黄色、3が灰色。胎土には共に5mm以下の長石を少量含んでいる。共に江戸時代中期のものと推定される。4は三巴文軒丸瓦で瓦当面上部の約1/3が残存している。左巻きの三巴文で、巴文は約半周して終わる。内区と外区を分かつ圓線は、隆起が低く一部不鮮明な部分がある。外区の珠文は小粒で、隆起が高く密に配されている。外縁は直立縁で高く幅1.5cmを測る。色調は黒灰色。胎土中に1~5mmの大粒の長石を多く含んでいる。室町時代後期に比定される。5は唐草文軒平瓦である。瓦當下外縁の一部を欠く以外は完存している。宝珠文を中心飾りとし、左右に主葉のみの唐草文を3反転と、上外方へ流れる唐草一葉を配している。外縁は幅広で高く、



第4図 出土遺物実測図

上下外縁幅に比して脇区が若干広い。頸部は段頸で深く、頸部下側面から瓦当裏面にかけてナデが施されている。瓦当外縁上端には面取りが行われている。また、瓦当面に離れ砂が付着している。色調は黒灰色。胎土中に5mm以下の長石を多く含む。室町時代後期に比定される。6は平瓦である。全長29cmを測る平瓦である。凹面は一次調整として縦位の板ナデの後、二次調整として横位の板ナデを行うもので、左右両端付近に板ナデ工具のあたりが残る。凹面狭端面はナデにより平滑にされており、幅1.5cmを測る。凸面は縦位の丁寧なナデが施されている。色調は灰色～黒灰色である。江戸時代中期のものか。7は玉縁付き丸瓦で、胴部広端面を欠く。胴部凹面には布目、コビキ痕、波状を呈する吊り紐痕を残す。胴部外面には縦位のナデが行われている。胴部の門面玉縁側縁および凹面胴部側縁の面取りは幅広である。色調は灰色。胎土には2mm以下の長石を含む。室町時代前～中期に比定される。8は鬼瓦である。鬼面の約半分が残存している。鬼面は全体に大きく盛り上がる意匠で、眼球は中実で大きく半円形に突出し、鼻は小鼻が大きく開き、歯は大きく前に迫出す表現が成されている。裏面はU字形に削り取られている。色調は黒灰色。胎土には長石粒が散見される。室町時代前期のものか。

3.まとめ

今回の調査では、延喜式に記載されている楠本神社三座のうちの楠本神社(木の本1丁目)の西に隣接する位置にあたるため、それらに関連した遺構・遺物の検出が想定された。調査においては、江戸時代後期の井戸(S E-101)を検出したのみで、それ以下の地層からも具体的な時期を示す遺構・遺物等の検出はなかった。ただ、S E-101から江戸時代後期の土器類と共に共伴して出土した室町時代前期～後期の屋瓦類については、楠本神社(木の本1丁目)と同じ小字内に存在していた道生寺^{註1}との関連が想起され今後注意を払う必要があろう。

註記

註1 楠本神社(木の本1丁目)境内の北西隅に「道生寺跡」の石碑がある。その石碑には「慶長の頃より浄土宗寺院として大正の末まで存立した」とある。その他、境内で紀年銘を持つものには、灯籠(宝永二年-1705)、狛犬(天保二年-1831)がある。

・井上正雄 1922 「大阪府全志 卷之四」

「道生寺は宇乾町にあり、浄土宗知恩院末にして阿弥陀佛を本尊とす。山號は詳ならず。七拾坪の境内に本堂庫裏を存す」

図版



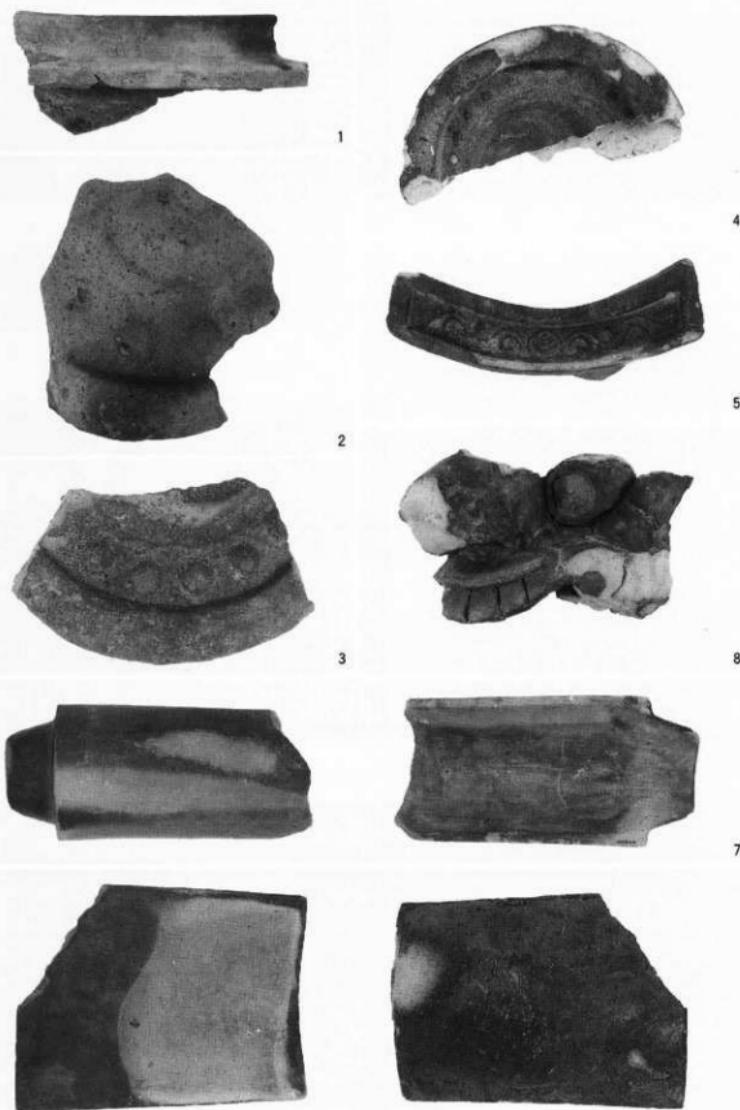
調査区全景（東から）



西壁（東から）



北壁（南から）



SE-101出土遺物

III 太子堂遺跡第11次調查（T S 2002-11）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市南太子堂3丁目78の1で実施した地下式耐震性貯水槽埋設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本発掘調査は、財団法人八尾市文化財調査研究会が太子堂遺跡内で行った第11次調査(TS 2002-11)で、調査業務は八尾市教育委員会作成の指示書(八教生文第220号 平成14年10月1日)に基づき財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成14年11月18日～11月22日(実働5日)にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約33m²を測る。
1. 現地調査には飯塚直世・岩本順子・國津れいこ・市森千恵子・横山妙子が参加した。
1. 本書作成に関わる業務は以下の通りである。
【遺物実測】國津・鈴木裕治・徳谷尚子・西村・實樹婦美子
【トレイス】徳谷
【執筆・編集】西村

本 文 目 次

1.はじめに.....	13
2.調査概要.....	13
1) 調査の方法と経過.....	13
2) 基本層序.....	14
3) 検出遺構と出土遺物.....	14
3.まとめ.....	17

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図.....	13
第2図 調査位置図.....	14
第3図 調査区平面図.....	15
第4図 出土遺物実測図.....	16

図 版 目 次

図版一 調査地周辺 機械掘削状況 壁面1～6層 壁面7～12層

III 太子堂遺跡第11次調査 (T S 2002-11)

1.はじめに

太子堂遺跡は、古墳時代前期から室町時代に至る複合遺跡で、地理的には、旧大和川の主流であった平野川の自然堤防上に位置している。当遺跡は、八尾市の南西部に存在しており、現在の行政区画では太子堂3丁目～6丁目、東太子2丁目、南太子堂1丁目～6丁目がその範囲と推定される。当遺跡周辺には、北に跡部遺跡、北西に亀井遺跡、東に植松南遺跡、北東に植松遺跡、南に木の本遺跡が存在している。

当遺跡内では、大阪府教育委員会(以下府教委と記載)・八尾市教育委員会(以下市教委と記載)・(財)八尾市文化財調査研究会(以下研究会と記載)が発掘調査を実施しており、古墳時代前期から室町時代の遺構・遺物が検出され、集落の存在が明らかになっている。今回の調査区が存在する遺跡内の南西部では、研究会第7次調査(2000西村)、研究会第8次調査(2000高萩)、研究会第10次調査(2001森本)を行っており、平安時代から鎌倉時代の遺構を検出し、居住域の存在が明らかになっている。

2.調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は地下式耐震性貯水槽埋設工事に伴う調査で、当調査研究会が太子堂遺跡内で行った第11次調査にあたる。調査は貯水槽埋設を対象に約33.0m²行った。

調査にあたっては、市教委の埋蔵文化財調査指示書に従い、現地表下約1.3m前後までを機械により掘削し、以下1.0mの厚みの地層は人力により行い、遺構の検出に努めた。

今回の調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載している標高値(調査地の北西側道路上T.P. + 10.0m)を使用した。



第1図 調査地周辺図 (S=1/2500)

2) 基本層序

現地表面はT.P.+9.9m前後で、以下12層の地層を確認した。

1層は盛土である。2層は粗粒砂混粘土の旧耕作土である。3層は粗粒砂混粘土。4層は粗粒シルトと微粒砂のラミナ、5層は細粒砂と中粒シルトのラミナで、両層ともに水成層である。6層は粘土で、酸化鉄を含んでいる。7層は粘土で、酸化鉄およびマンガンを含み上面は攪拌されており土壤化している。平安時代後期ころの土師器や瓦器などの破片が調査地の中央から北側で多く出土した。この層の上面で調査(1面)を実施した。8層は細粒シルトで、マンガン斑がある。この層からは平安時代中期～後期の土師器や黒色土器などの破片が出土している。9層は粘土で植物遺体を含み、土師器や須恵器の破片が少量出土した。9層上面で調査(2面)を行ったが遺構の検出はなかった。10層は粘土で、無遺物層である。11層は粘土で、無遺物層であるが木の破片が少量出土した。12層は粘土。12層上面で調査(3面)を行ったが遺構の検出はなかった。

3) 検出遺構と出土遺物

1面

T.P.+8.65～8.5m前後の7層上面で、平安時代後期の溝3条(S D101～S D103)を検出した。これらの溝は、東西方向にはほぼ平行して伸びている。

中央から南側は約0.1～0.15m程度低くなる地形で、遺構の検出はなかった。

溝(S D101～S D103)

S D101

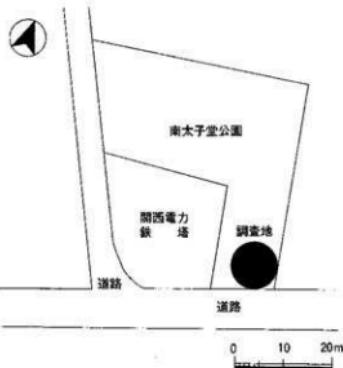
検出長3.0m、幅約0.3mを測る。断面形状は逆台形で、深さ約0.1mを測る。埋土は2.5Y4/1黄灰色粘土で、須恵器壺(1)、黒色土器碗(2)、土垂(3)が出土した。1は平らな底部に、断面逆台形の高台が付く。底部および高台部内外面回転ナデ。2は平らな底部に、「ハ」の字にひらく高台部が付く。底部および高台部は内外面ナデ。内面が黒い。3は中央が膨らむ管状で、貫通する孔がある。外面に黒斑あり。

S D102

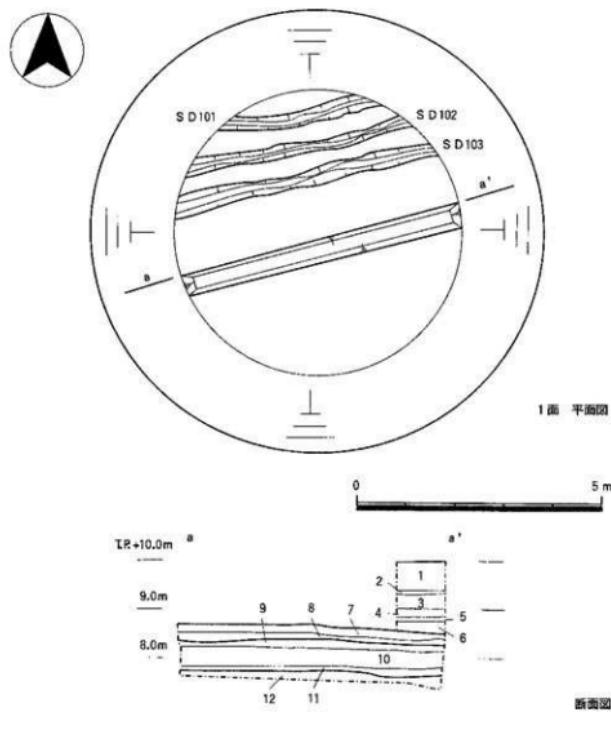
検出長4.5m、幅約0.2～0.3mを測る。断面形状は逆台形で、深さ約0.1mを測る。埋土は2.5Y4/1黄灰色粘土で、須恵器壺(4)が出土した。4は外反する口縁部で、端部は面をもち、凹線を施す。内外面ともにヨコナデ。

S D103

検出長5.5m、幅約0.2～0.4mを測る。断面形状は逆台形で、深さ約0.1mを測る。埋土は2.5Y4/1黄灰色粘土で、土師器皿(5)、瓦器碗(6)、瓦器皿(7)が出土した。5は内外面ナデ。6は体部内面ミガキ、外面ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。7は内外面ヨコナデを施す。

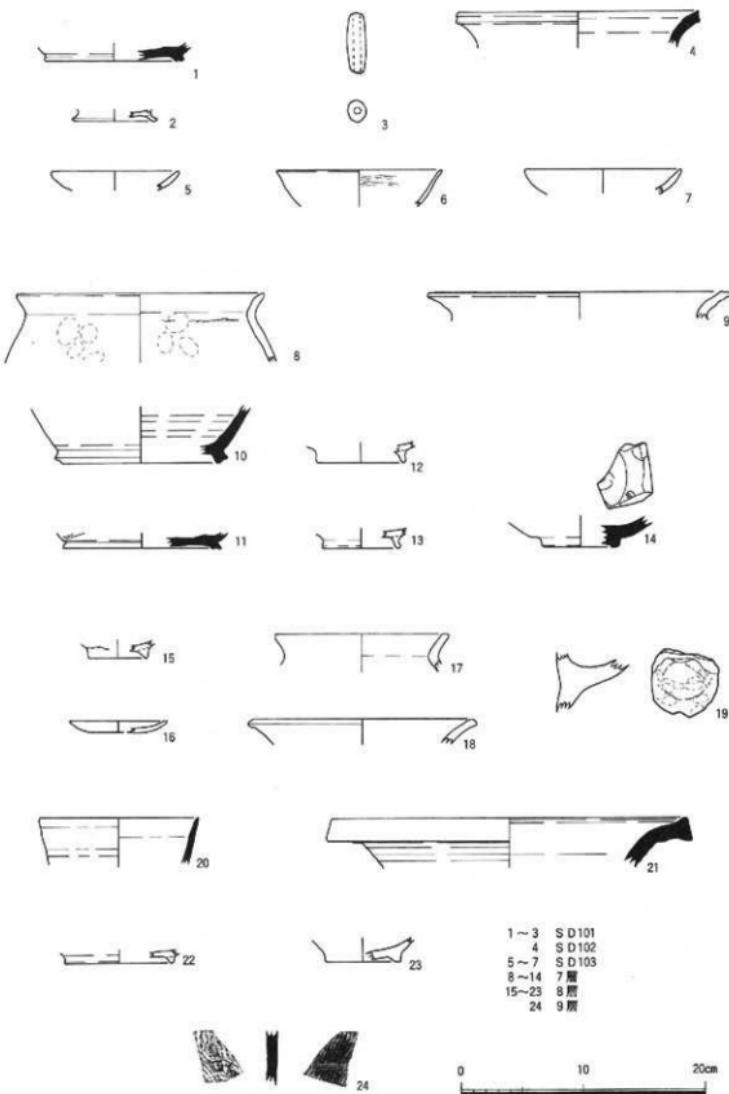


第2図 調査位置図(S=1/1000)



- 1層 塩土
- 2層 10Y4/1灰色粗粒砂質粘土 (旧耕作土)
- 3層 7.5Y4/3褐色粗粒砂混粘土
- 4層 10Y9/4に、びい黄褐色粗粒砂と中粒シルトのラミナ
- 5層 10Y9/4に、びい黄褐色粗粒砂と中粒シルトのラミナ
- 6層 10G6/1暗青灰色粘土 鹽化鉄を含む
- 7層 2.5Y4/6オリーブ褐色粘土 鹽化鉄、マンガンを含む 上面で調査 (1面)
- 8層 5Y6/2灰オリーブ色鐵性シルト マンガン斑あり
- 9層 10G4/1暗綠灰色粘土 植物遺体を含む 上面で調査 (2面)
- 10層 10G6/4暗青灰色粘土
- 11層 10G3/1暗綠灰色粘土
- 12層 N4/0灰色粘土 上面で調査 (3面)

第3図 調査区平断面図 (S=1/100)



第4図 出土遺物実測図 (S=1/4)

遺構に伴わない出土遺物

7層からは土師器壺(8・9)、須恵器壺?(10・11)、黒色土器椀(12・13)、白磁碗(14)が出土した。10は「ハ」の字にひらく高台で、端面にキザミ目を施す。11は体部外面にヘラによる記号を施す。12・13は内面が黒い。14は見込みに紋様を施す。

8層からは土師器杯(15)、土師器皿(16)、土師器壺(17・18)、土師器鍋?(19)、須恵器杯?(20)、須恵器壺(21)、黒色土器椀(22・23)が出土した。19は把手の破片で全容は不明であるが、鍋か瓶の把手になると思われる。22・23は内面が黒く、22は底部が平坦である。

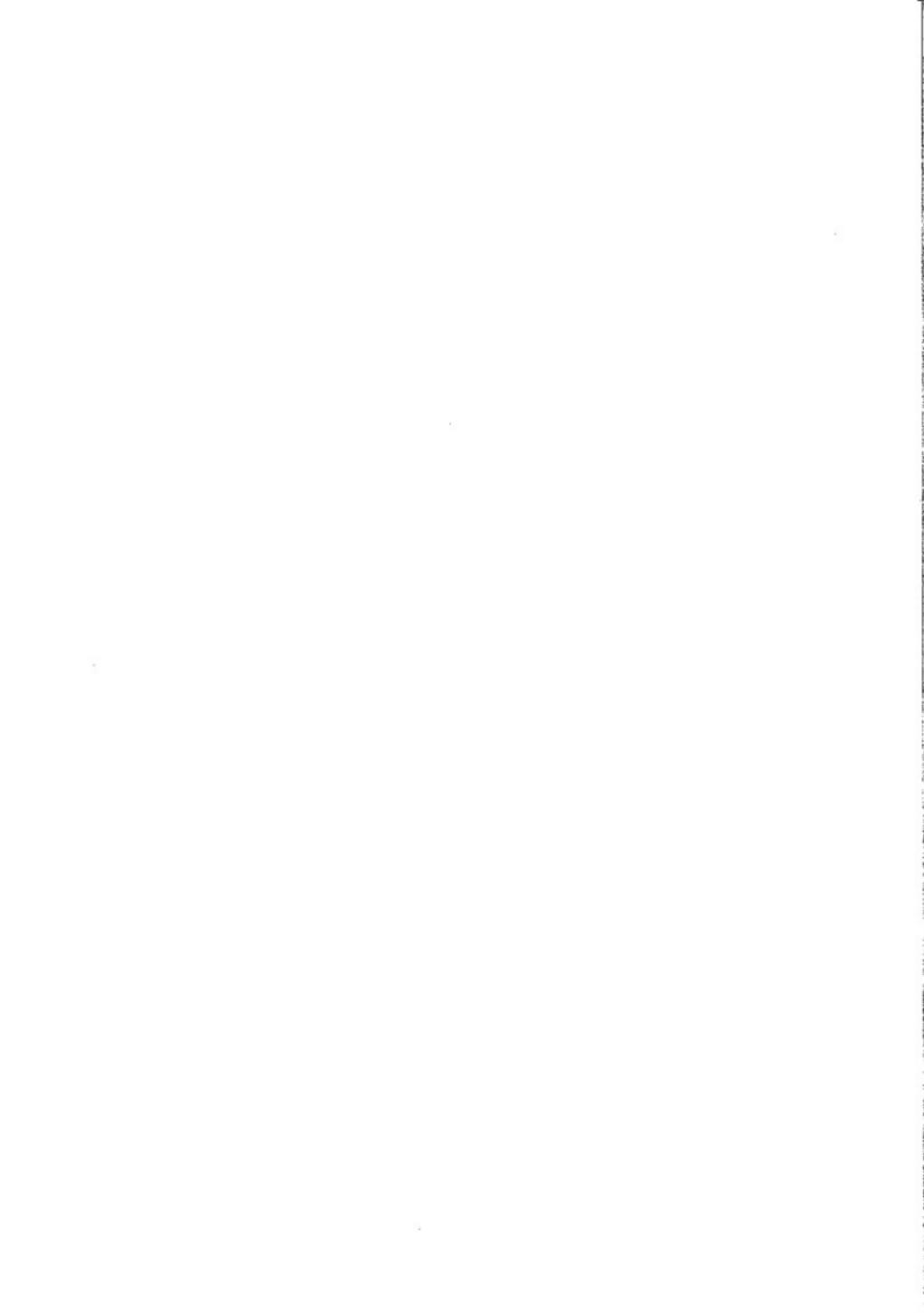
9層からは須恵器壺(24)が出土した。内面同心円タタキ、外面格子タタキのちハケを施す。

3.まとめ

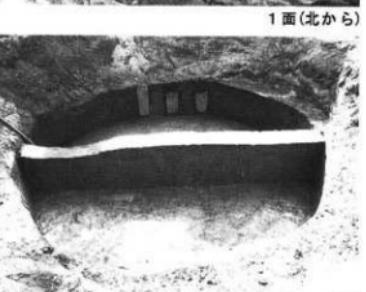
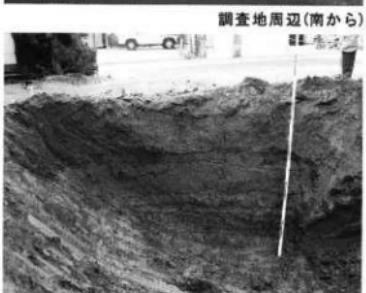
1面で検出した平安時代後期の溝は、畠溝と思われ、今回の調査地は、生産域であることが確認できた。この時期の居住域は、今回の調査地の北西側約300m地点（研究会7次調査・同8次調査・同10次調査）で確認していることから、今回の検出した生産域は、この居住域とセット関係になる可能性があると考えられる。

参考文献

- ・岡田清一他 1993「I 第1次調査(TS83-1)発掘調査概要報告」「太子堂遺跡〈第1次調査・第2次調査報告書〉」財団法人八尾市文化財調査研究会報告36
- ・坪田真一 1993「II 第2次調査(TS90-2)発掘調査概要報告」「太子堂遺跡〈第1次調査・第2次調査報告書〉」財団法人八尾市文化財調査研究会報告36
- ・高萩千秋 1993「XVII 太子堂遺跡第4次調査(TS92-4)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」財団法人八尾市文化財調査研究会報告39
- ・高萩千秋 1994「21.太子堂遺跡第5次調査(TS93-5)」「平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」
- ・成海佳子・藤田道子 1997「VII太子堂遺跡(第3次調査)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告58」財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 1997「VII太子堂遺跡(第6次調査)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告58」財団法人八尾市文化財調査研究会報告
- ・西村公助 2000「IXIV太子堂遺跡(第7次調査)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告66」財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 2000「XV太子堂遺跡(第8次調査)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告66」財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 2000「X太子堂遺跡(第9次調査)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告65」財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・森本めぐみ 2001「IX太子堂遺跡(第10次調査)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告67」財団法人八尾市文化財調査研究会



図版



IV 竹渕遺跡第10次調査（TK2003-10）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市竹湖東4丁目1番地で実施した竹渕小学校給食配膳室設置工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本調査で報告する竹渕遺跡第10次調査(TK2003-10)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第58号 平成15年5月14日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成15年6月10日～6月12日(実働3日間)にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約25m²を測る。
1. 現地調査においては鈴木裕治・實樹婦美子・横山妙子が参加した(五十音順)。
1. 本書に関わる業務(遺物実測・図版トレース・遺物撮影)および執筆・遺物撮影・編集は岡田が行った。

本　文　目　次

1.はじめ	19
2.調査概要	20
1) 調査の方法と経過	20
2) 層序	20
3) 検出遺構と出土遺物	21
3.まとめ	22

挿　図　目　次

第1図 調査地位置および周辺図	19
第2図 調査区設定図	20
第3図 平面および地層断面図	21
第4図 第3層出土遺物実測図	22

図　版　目　次

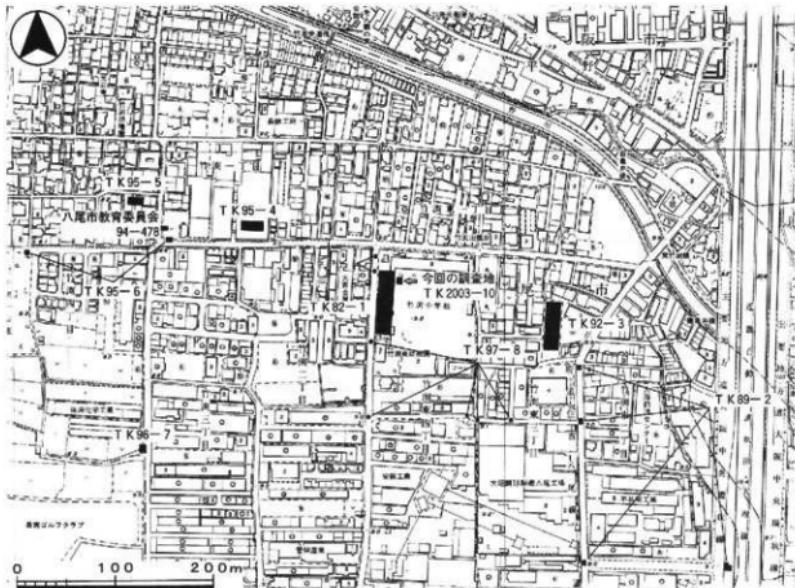
- 図版一 完掘全景 北壁面東部および東壁面
図版二 重機による表土掘削風景 調査地近景

IV 竹渕遺跡第10次調査 (TK2003-10)

1. はじめに

竹渕遺跡は八尾市中西部に位置し、現在の行政区画では竹渕1～5丁目、竹渕東1～4丁目にあたる。地理的には、旧大和川の主流である平野川左岸の自然堤防上に立地する。当遺跡の周辺には北に加美遺跡・加美北遺跡(大阪市)、北東に久宝寺遺跡、東に龟井遺跡、南東に城山遺跡が隣接している。

当遺跡は昭和57年の竹渕小学校の校舎建替えに伴う遺構確認調査によって、古墳時代後期の遺物を含む地層が確認されたことにより、遺跡として認識されるようになった。その結果を受け、当研究会は同年、校舎建替え部分を対象とした第1次調査において、古墳時代後期の竪穴住居、土坑、溝といった居住域を示す遺構と当該期の多量の遺物を検出するに至った。今回の調査地はその北東側に位置する。第1次調査以外に近隣で実施された調査成果を見ると、竹渕小学校の西側において2件の公共下水道工事に伴う調査²¹が実施されている。この調査では、面的な制限があるものの、いずれも古墳時代後期～平安時代に相当する地層を確認している。また、他に特筆すべき既往の調査成果としては、今回の調査地から東へ約150m地点で平成4年度に当研究会が実施した第3次調査²²で、古墳時代後期(6世紀初頭)²³の方墳が検出されている。



第1図 調査地位置および周辺図 (S=1/5000)

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、小学校給食配膳室設置工事に伴うもので、当研究会が本遺跡内で実施する第10次調査にあたる。調査対象は建物本体の基礎部分に相当する南北約6m×東西約5mの面積約30m²である。なお、調査対象部分については調査前の協議の段階で南北約6m×東西約4mの面積約25m²ということであった。しかし、本調査になって重機掘削中に現地表下約1~2m間にガス管および上・下水道管が複数埋設されていることが判明し、現状では調査不可能ということとなった。そこで再度協議を行った結果、各管理設部分を避け、その分現地の許される限り面的に東側へ拡張して調査を実施することで合意した。

掘削方法と深度については、昭和57年に実施された西側の校舎建替えに伴う第1次調査(TK 82-1)結果を基に、現地表(T.P.+8.8m前後)下1.8m前後までの地層を重機によって排除した後、以下0.4m前後を測る深度まで人力と重機を併用して掘削、そして各地層ごとに平面精査し、遺構・遺物の検出に努めた。なお、工事対象深度までの掘削終了終、調査区東部中央に南北約2m×東西約1mの規模で、さらに約0.3mの深さまで掘削し、下層確認調査を実施した。

2) 層序

現地表はT.P.+8.8m前後を測り、現状は小学校運動場となる。現地表下0.5m前後は、小学校建設に伴う盛土(第0層)およびガス管や上・下水道管の埋設時に伴う搅乱層(第0'層)で構成される。この搅乱は調査区の西部と中央部で、各東西幅約1mで南北に延びている。この部分については調査ができないため、深度もさることながら搅乱を受けていない配管直下の地層および遺構・遺物についても不明である。

以下、調査区内において掘出できた第1~10層について列記する。

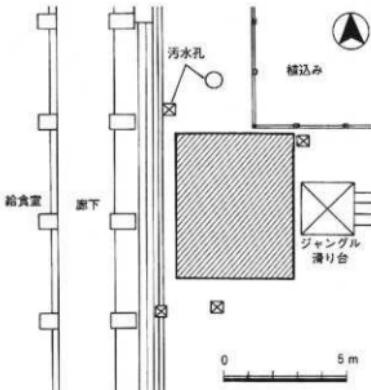
第1層：7.5YR6/2灰褐色シルト。層厚0.1m前後。調査区の北西部にのみ存在する。下層の第2層も含め、層内に攪拌を受けた偽縛が見られることと西側の第1次調査(TK 82-1)結果から小学校建設以前にあたる近・現代の作土層と考えられる。

第2層：7.5YR4/2灰褐色砂礫混じりシルト。層厚0.1~0.2m。調査区の北部にのみ存在する。

第3層：10YR4/2灰黄褐色シルト。層厚0.2~0.5m。平安~鎌倉時代に比定される土師器皿や瓦器碗の破片が若干含まれる。

第4層：7.5YR4/4褐色シルト。層厚0.25~0.3m。酸化鉄分を多量に含む。調査区北東部では、本層上面から平安時代前期頃の遺構内埋土(A・B層)と推定される堆積層が切り込まれる。

第5層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト。層厚0.2~0.3m。時期不明の須恵器の細片を若干含む。



第2図 調査区設定図(S=1/200)

第6層：7.5YR6/6橙色シルト。層厚0.1~0.4m。南部に向かうほどに層厚が増す。

第7層：2.5Y5/1黄灰色砂質シルト。層厚0.1~0.3m。水成層である。

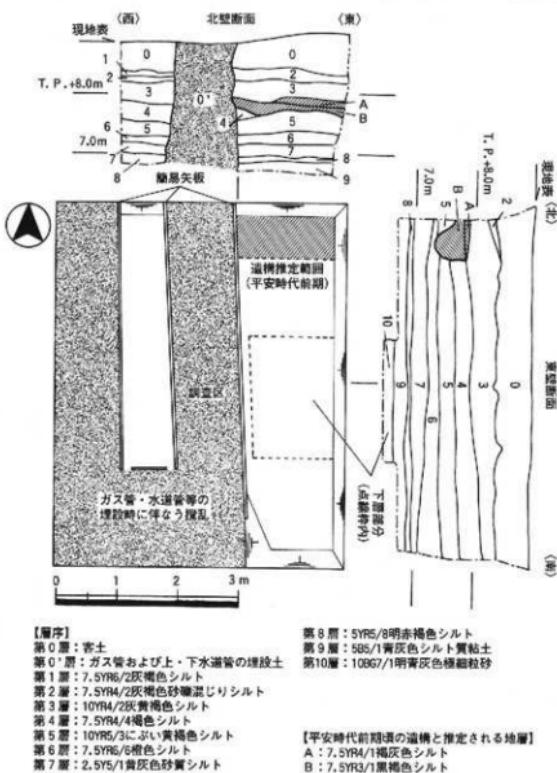
第8層：5YR5/8明赤褐色シルト。層厚0.1~0.2m。全体的に希薄な堆積層で、酸化鉄分が多量に含まれる。

第9層：5B5/1青灰色シルト質粘土。層厚0.2m前後。

第10層：10BG7/1明青灰色極細粒砂。層厚0.2m以上。遺物が確認されないので、断定まではいかないが、西側の第1次調査(T.K.82-1)結果と層位的に照合すると、古墳時代後期以前の河川内埋土であることが推測される。

3) 検出遺構と出土遺物

今回の調査では、西側の第1次調査で検出されている古墳時代後期に比定される遺構および遺物は見つからなかった。しかし、それよりは新しい時期であるが現地表下1.0m前後(T.P.+7.8



第3図 平面および地層断面図(S=1/80)

m前後)にあたる北壁および東壁において、平安時代前期頃の遺構と推定される2層の堆積層(A・B層)を確認することができた。面的には重機掘削範囲内といふこともあるが、遺構確認できなかったことが残念である。

出土遺物は、第3層内から平安時代前期(9世紀後半)頃に比定される土器器杯や椀の破片を数点検出した。その中で図化できたものは、椀底部の破片1点(第4図)のみである。この椀は黒色土器A類と呼ばれるもので、内面のみ燃し焼された炭素が付着することによって黒色を呈する。調整については、内面はミガキが施されるものと推定されるが、磨滅により不明瞭である。底部外面には高台貼り付けのナデが明瞭に認められる。

3.まとめ

今回の調査地の西側で実施された第1次調査結果をみると、古墳時代後期(6世紀初頭～中葉)に比定される竪穴住居・土坑・小穴といった居住域に伴う遺構は南部に集中している。一方、北部は南部に比して遺構がかなり希薄で、調査成果によると北部で検出された溝SD3からは須恵器・土器器の小片が僅かに見られる程度ということである。このSD3は、北西～南東方向に延びる最大幅6.5mという比較的幅広の溝で、検出状況から居住域の境界としての見方もできる。本溝は今回の調査地に最も近接する遺構であるが、今回の調査においては検出することができなかった。それは本溝の北岸の復原推定にみられるように、今回の調査区では調査不能部分にあたっていることも検出されない要因の一つかもしれない。いずれにせよ、第1次調査区北部と本調査地点を照合すると、SD3の位置関係および出土遺物の希薄さから、今回の調査地点は当該期においては居住域の縁辺の地であったことが想定される。次に、調査区北東部の地層断面で確認した平安時代前期の遺構とも想定される堆積層については、調査区のさらに北東部に広がっていることが推測され、今後周辺における調査で留意しなければならないところである。

(註)

- 註1 高萩千秋 1989「II 竹洞遺跡(第1次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」(財)八尾市文化財調査研究会報告23
註2 成海佳子 1999「IX 竹洞遺跡(第8次調査)」「X 竹洞遺跡(第9次調査)」「財團法人八尾市文化財調査研究会報告62」財團法人八尾市文化財調査研究会
註3 原田昌則 1993「XV 竹洞遺跡第3次調査(TK92-3)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」財團法人八尾市文化財調査研究会報告39

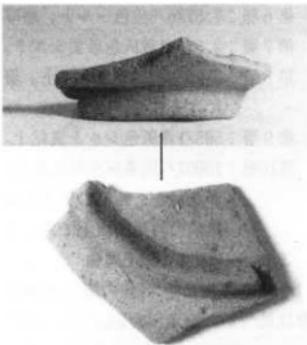
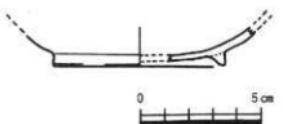


写真1 第3層出土遺物



第4図 第3層出土遺物実測図(S=1/2)

図 版



完掘全景（南から）



北壁面東部および東壁面（南西から）



重機による表土掘削風景（北西から）



調査地近景（南から）

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅかいほうこく
書名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告85
副書名	I 楽音寺遺跡（第3次調査） II 木の本遺跡（第13次調査） III 太子堂遺跡（第11次調査） IV 竹洲遺跡（第10次調査）
巻次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	85
編集者名	I 西村公助、樋口 勲、II 旗田昌則、III 西村、IV 間田清一
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市辛町4丁目58-2 TEL・FAX 0729-94-4700
発行年月日	西暦2005年3月31日

ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
がくおんじいせき 楽音寺遺跡 (第3次調査)	おおさかふやおしがくおんじいちょうめ 大阪府八尾市楽音寺1丁目 ないし 地内	27212	53	34度38分 21秒	135度38分 21秒	20030410 ～ 20030611	30	上水道
きのもといせき 木の本遺跡 (第13次調査)	おおさかふやおしきのもと1ちょうめ 大阪府八尾市木の本1丁目	27212	35	34度35分 51秒	135度35分 25秒	20041220 ～ 20041222	29	防火水槽
たいしどういせき 太子堂遺跡 (第11次調査)	おおさかふやおしみなみいしどう 大阪府八尾市南太子堂 うちうめ 3丁目	27212	62	34度36分 24秒	135度35分 28秒	20021118 ～ 20021122	33	防火水槽
たけふらいせき 竹洲遺跡 (第10次調査)	おおさかふやおしあけふらひかり4ちょうめ 大阪府八尾市竹洲東4丁目	27212	61	34度36分 51秒	135度34分 26秒	20030610 ～ 20030612	25	学校施設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項			
樂音寺遺跡 (第3次調査)	集落	-	弥生時代以前の地層	-				
木の本遺跡 (第13次調査)	集落	江戸時代後期	井戸	室町時代前～後期の 瓦 江戸時代後期の土器				
太子堂遺跡 (第11次調査)	集落	平安時代	溝	平安時代の土器器・ 須恵器・黒色土器				
竹洲遺跡 (第10次調査)	集落	平安時代前期	-	平安時代前期の黒色 土器輪				

財団法人八尾市文化財調査研究会報告85

- I 楽音寺遺跡 (第3次調査)
- II 木の本遺跡 (第13次調査)
- III 太子堂遺跡 (第11次調査)
- IV 竹 渕遺跡 (第10次調査)

発 行 平成17年3月
編 集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2
TEL・FAX (0729) 94-4700

印 刷 (株)近畿印刷センター
表 紙 レザック66 <260kg>
本 文 書籍用紙 < 70kg>
図 版 ニューエイジ <135kg>

